

A-71

新刊要旨

全

久

三



大教詔

天祖立極垂統

列皇相承

44. 9. 7

一致億兆同心治教明于土風

俗美于下而中世以降時有汚隆道有顯晦治

教之不洽也久矣今也天運循環百度維新宜

明治教以宣揚惟神之大道也因新命宣教使



布教天下汝群臣衆庶其體斯旨

御名御璽

明治三年正月三日

緒言

我が國は昔から天祐神助厚く皇室の御榮え國家の安泰他に其比を見ません殊に有りがたいのは吾々臣民は明治の大御世に生れて古今未曾有の隆運にあひ古人の夢にだも見ることでござる文明の惠澤照代の幸福を受くる此の大なる慶でありますこれは全く神と君との厚き御惠によることとありますから此御惠は束の間も忘れてはなりません然るに一時世の風潮に伴ふて敬神思想は洗ひ流されんとする有様で

ありましたが近來上下共敬神崇祖の誠情勃興しつゝ
 あるは實に悦ばしい事であります神を敬ひ祖先を崇
 めるのは即ち忠孝の本であつて神教を奉し神道を守
 るは即ち人倫道德の基でありますから吾が國民たる
 者は一日も忽にしてはならぬのであります故に筆に
 關に行に此敬神崇祖の美風をどこまでも奨励して實
 踐躬行せねばなりません之を普及せしむるには講演
 なり著述なり祭典儀式等種々ありましようが何れに
 もせよ敬神思想の發展に資するならば大に力を盡さ

ねばなりません就中神徳を記述し御事歴を説明せる
 傳記の如きむかしから澤山ありますが學のある人又
 は志の篤き人はそれらの書について之を究めもし修
 養もしますむがさもない者は語高く旨深きものは最初
 から讀まうともせず又讀むとしても意味の通じ難き
 爲に忽ち之を捨てゝ顧みずそこで賢は益々賢なれど
 も愚は彌々愚に終るといふ様な憾みなきを得ません
 それで何人にも解し易くして兒童婢僕に至るまで敬
 神の大要を知らしめ益々神國神孫たる實を現はし忠

良の誠を盡す國民たらしめんことを希ふ微意より遂
に此冊子を編し敬神要旨と題し心ある人に頒つこと
とした次第であります

明治四十四年九月

編者しるす

敬神要旨目錄

吾々の崇めまつる神	一	頁
神と人	二	頁
病氣災難の原因	三	頁
水晶の様な心をおとむる事	四	頁
神教	五	頁
往還大道	六	頁
神の利益	七	頁
天神七代	八	頁
地神五代	八	頁
道は一なり	九	頁
眞の勇氣	九	頁

今 一 足……………一五頁

救 助……………一五頁

幸福をのぞむ者……………二〇頁

神の子孫……………二〇頁

立ても居ても……………二九頁

悦びと悲み……………二九頁

健康は第一の寶……………三〇頁

濁つた人より清い人……………三三頁

神 信 心……………三三頁

感 心 上 手……………三七頁

活 き よ……………三七頁

心 通 り……………四〇頁

足元が肝腎……………四〇頁

顔 は 看 板……………四一頁

施した者は忘れ受けた者は忘れな……………四一頁

神に愛せられよ……………四三頁

神にもたれよ……………四四頁

吾 が 靈 魂……………四六頁

命の延び縮み……………四八頁

眞 の 交 際……………四八頁

濟まぬこと……………四九頁

威徳を一にす……………五〇頁

自由をゆづれ……………五四頁

徳 を 積 め……………五五頁

積むも崩すもみな自分……………五八頁

本末を誤るな……………五九頁

靈の働きは大なり……………六二頁

男女の區別なし……………六二頁

叮嚀親切……………六三頁

美しいものと汚穢もの……………六四頁

活動……………六五頁

靈魂と分靈……………六五頁

嘆くことも怨むこともいらぬ……………六六頁

愛を誤るな……………六六頁

軀よりも心……………六八頁

苦は樂の種……………六八頁

息……………七〇頁

敬神要旨

石田守義 著

○吾々の崇めまつる神

吾々の崇めまつる神は、一に天之御中主神、次に高皇產靈神、次に神皇產靈神、この三柱の神を、天津大神と、あがめまつります、此神は天地よりも、先きに、おでき遊ばした神で、天地をはじめ、八百萬神人間、萬物、一さいの物を、お造りなされた、神で、世にこれを、造化の三神と申す、此神は、昔も今も、これから後、いつくまでとも、おかはりなく、萬物を、おつくりなされ、人間は申に及ばず、總べての物の、たましひ、こころ、ちゑなども、おあたへ下され、あのよ、このよを、お守り下さる、此上ない、ありがたい、大神で、その大い

なる御徳は、筆にも、言葉にも、のべつくすことは、できません。

○神と人

人の靈魂は、天つ神より、さづけられ、軀は、天つ神より、貸して下さつてありまして、生れて、出るのも、死んでゆくのも、皆この天つ神の、お世話を、受けねば、ならぬのであります、それで、神と人とは、恰親子のごとく、神は親、吾々人間は、子の様なものであります、又神は、御先祖、われ々は、その子孫であります、それで、神の御心に、叶へば、君の、御心にも叶ひ、生みの親の、心にも、叶ふ、君親の心に叶へば、神の御心にも、叶ふのであります、そこで、神の道は、人の道、人の道は、神の道と申てよいのであります、それゆゑ常に、神をうやまひ、心行を、正しうして、君には忠、親には孝を、つくし、以て人の人たる、本分をつとめて、神の御恵、君の、御恩に

報ひ奉るべきであります、

○病氣災難の原因

病氣災難のもととは、おほかたは、人々の心から、おこることが、多いのであります、人は元々、神より、授けてもらうた、通りの、まことの心を以て、正しい行をすれば、病氣も、災難も、ない筈であります、が、兎角、おもひがちひ、心得ちがひ、通りちがひを、致しますゆゑそれが、だんく、積り重なつて、病氣にもなれば、不幸やら、災難などを、招く様になるのであります。それで、人は常々、心をみがき行を正しうして、人を助け、御國の爲につくし、その眞實、眞心が、神の御心に叶ふ時は、病氣災難ものおれ、家も身も榮えるのであります、そこで、これまでに、罪とがを、をかしてをる者も、改め直してよい心になり、よい行をして、其罪とがを、はらひけして、神に救は

れる様に、致したいものであります。

○水晶の様な心をおさむること

水晶の玉の、圓く、かどなく、きづも、くもりも、ない、明かな、うつくしい、心をおさめることが、第一であります、人の心はとかく動きやすく、かはりやすく、又くもりもし、にどりもするので、ありません、其動いたり、變つたりするのも善い方へ、動きかはつて、改良進歩のは、まことに、よい事でありますが、悪しき方に動きかはつて、誠を失ふ様では、いかぬから、心を鎮め、靈魂をおさめて、曇ればはらひ、濁ればすまして、すき通りである、水晶の様なうつくしい心になり、かげ、ひなた、うそ、いつはり、などの、ない、様に、致したいものであります、玉は昔から柔和なのを以て、徳とし、仁恵、慈愛など、みな此玉の徳と、いたしてあります、それで、これを心にお

さめて、口と心と行と、三つをそろへて、明かに通りさへすれば、神よりは、厚きお守をいたゞき、人よりは、可愛がられ、現世では、人の人たる道を、つくす事ができ、死んでは幽世で、神のあつき、御恵をうけ、子孫は、永く榮えるゆゑ、水晶の心をおさめて、通ることが肝要であります。

○神 教

世界の、多くの人が、人げんの通る、正しい道を、おすれたり、又自分勝手な、ことばかり考へたり、人のめいわくを、かまはず、自分さへよけりや、人はどうでも、よいといふ、ありさまになつてゐる者が多いゆゑ、そんな、不親切な、わるい種まきをして、後日にそれが、はへてきた時に、難儀せねばならん、つらいめをせにやならん、それが、可愛そうであるから、神は、わるい種まきをよぬ様に、人の

通るまつすぐ、正直な、道を教て、後日みなく、幸福の實のなるやうに、よい種まきを、日々にさすやうにと、おぼしめし、たとへ、いさよかたりとも、人の助かる、善い心づかひやら、善い行ひをさせるのが、神の教で、これが神の思召であるから、世の人は、みなこゝに、心をおいて、ますく誠の道に、進まねばなりません、

○往還大道

日本の國は、神國と申て世界において、一番上位に、あるべき、國である、外の國々とは、だんが、つかねばならぬのであります、それで、段がつく様は、開け進みませんと、國の光りがでません、それで、日本國にすむ人は、申までもなく、どこの何國に、すみても、日本人は、心なり、行なりを、十分正しうして、誠の道をふみ、行ふて、なければなりません、どんな下の人でも、神の教を守りて、誠の道をふみ、

あれでこそ、神の國の人げんであると、いわれるやうに、此日本の國民が眞實の行をして、眞のねうちを、現はすことに、心をおかば、此國はもちろん、外國でもどこのいづくでも、其眞實誠はかゞやき、神は厚く御守り下され、人もあがめ、國の光、身の光も出で、現世ばかりでなく、幽世も、やすくと、通らるゝやうに、神が御守下さるから、をそれることも、あやぶむことも、歎くこともない、しんに安心な道、通りよい道、廣い堅い道で、ありますから、これが人々のふむべき、往還大道であります、

○神の利益

神の利益は、九死一生といふ場合か、一心不乱になつた時か、又は、燃ゆる様な、熱心眞實のある人に、ありくと現はれるものであります、信仰をせぬ人には、ありもせず、よし有つても悟りがつきません、

○天神七代

一代 國常立尊

二代 國狹槌尊

三代 豐斟淳尊

四代 湍土煮尊

五代 大戸之道尊

六代 面足尊

七代 伊弉諾尊

沙土瓊尊

大苦邊尊

惶根尊

伊弉册尊

伊弉册尊

伊弉册尊

伊弉册尊

○地神五代

一代 天照大神

二代 正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊

三代 天津彦彦火瓊杵尊

神の道は君の道、君の道は人の道であつて、道は一つであります。

○眞の勇氣

此世は、善いことばかりはない、たのしい事ばかりはない、どうして

も、月にむら雲のさはり、花にあらしの、なげきがあります、これは、昔

も今も、のおれられんのであります、物事が、順にゆく時には、たれも、

心丈夫にあつて、此世は、たのしい世である、おもしろい、我が身で

あると、おもひ、何をみても、何をきいても、こういふ時には、よろ

こびが、満ちてゐて、氣ははれぐとしてをりますから、することな

すことが、苦なしに出來、身もたつしやてあります、さて追風に帆

をあげた船のやうに、いかぬ日があつて、大風がふき、浪があれと
 いふ時には、いつ船が、ひつくりかやるやら、わからぬから、誠にあ
 ぶないのであります、それと同じ様に、さかさまごとが、我が身の上
 やら、家の内に、おこると、大抵の人が、氣も心も、てんどうして、
 途方にくれ、かなしみ、歎きで有るちゑも出す、又考へも出ぬやうに
 なり、うろたへ、さわぎ、只様なげきの淵、かなしみの谷に、をちこ
 んてしまひますが、こゝろいふ時に、つよい、心がいる、をちついた心
 がいるので、あります、その強い心を、定めるには、我が身をすて
 て、かよるがよい、たとへ、たましひ一つとなつて、死んでも、靈魂
 は、死ぬるものではないと云ふことを、心得て、死んでも構はぬと
 心定めをするのである、靈魂は、いつも生き通してあるといふ心が、
 おさまつてあるゆゑ、九死一生の場合になつても、うろたへず、心が

をちついてをる、それで、死ぬる覺悟をしたら、をそれぬ、をそれぬ
 から、何事もよしあしを、あやまらずに、物事を、うまく、しとげるの
 てあります、それを我が身をいとひ、我が爲を思ふと、おそれる心や
 ら、氣づかひ、物案じなどの、心がてる、臆病者は、大かたが、わが
 身思案、わが身びいきが、さきにてて、人の爲め、國の爲めと、思ふ
 心の、ないものか、又は有るとしても、其心がうすい人てあります、
 たとへ、からだは、仆れても、靈魂は、生きてゐて、死ぬるものでは、
 ないといふことを、知てゐる人は、よく安心がてきる、安心の出來た
 人なら、恐れる心はでぬ、危ぶむ心もをきぬ、
 心定めをする、安心立命をするといふも、此死んで、生きると云ふこ
 とを、知るのであります、死ぬとも、更にいとはぬと、覺悟をしたら、
 此上の決心はありません、つらいも、なきけないも、不自由も、不足

もしんぞいも、何もかも、皆思ひかへられます、日本人が、軍につ
よいのには、こゝにある、君の爲、國の爲には、命をすてゝ、つくすと
云ふ強い心、たのもしい心が、あるからで、あります、死ぬる覺悟を
する者は、却つて死なぬ、彈丸もあたらぬ、よし當つても、なんとも
ない、身體の仆れたのは、着物をぬぎすてたと、同じ事である、ふる
い家をこぼつて、新しい家を、建てると一つことである、生れか
り若くなつて、出て来て、又働く、何べんでも生れかはつて、御國の
爲につくすといふ、心がちやんと定つておるから、安心なものである、
勇ましいものである眞の勇氣は、此心から出るのとあります、
誠を神がお守り下さる、君のため、國の爲につくすといふ、その眞心
に、神の御力が加はる、人を愛し人を助けるといふ、其眞實に、神の
光りが照りそふのである、私心のない、清淨潔白な、美しい、月や雪

の様な、さびたくした心は、神は宿ります、死すべき時には、いかに
よく散る、櫻の花の様な、見事なナ和魂をば、神が愛して下さるから、
大丈夫である、安心なものである、力があれば、神は力をそへて下さ
る、智慧が足らねば、智慧もかして下さる、人数が足らねば、人数も
與へて下さる、金が入れば、金も寄り集まる、誠實の心があつて、神
の御守護を頂けば、何も不自由はないのであります、其誠實を成しと
げるのに、勇氣がいる、劍の徳がいりようである、つるぎは、つらぬ
くと申して、誠をつらぬく、正義を押し通ふす、悪を切りはらふといふ、
上には、どうしても、勇氣が、みちくしてあらぬと、神が十分に御守
り下さることを、出来ぬ、勇氣さへ満みちておれば、厚き御守りがあ
るから、死ぬるところも活きる、負ける處も勝つ、成る、進む、儲か
る、喜ぶ、楽しむ、笑ふといふ様に、だんくといふ喜ばしい方へ、神が

お手引下さるから、大丈夫、大安心である、もし勇気がない者、臆病者、誠をかへる者ならば、神のお手はなれる、力ぞへがない、ほつておかれる、それで活きられる所でも死ぬる、勝つべき事も負ける、敗れる、遅く、損をする、悲む、苦しむ、泣くといふ様に、次第々々に、あしくなるのであります、

むかしから聖人とあがめられ、偉人と尊ばれ、其外譽れ高き人々は、皆誠實で、眞の勇氣があつて、神の厚い引立を受けた人、神の御心に叶ふた、人であります、

何事をするにも、勇氣がいらるのであります、たとへてみると病氣にかかつて、病にうち勝つ心がいる、介抱人となつても、傳染りはすまいかと、をそれる様では、いけません、其外機械を扱ひ、種々の労働をなすにも、すべて勇氣元氣がいらるのであります、之れが十分にあつて、

そして神にたよりて、誠實になさば、神は屹度、吾々をだきかゝへして、下さる、必ずお引立て下さるのでありますから、人がつき飛ばさうとしても、突きとばされることはありません、安心なものであります、

○今一足

今一足進めば、安心な道に出で、面白い場所へ出られるのであるが、その一足を、ふみだし兼ねる、人が多いのであります、

○救助

一人でも、多く人を救ひたいものであります、人を救ふといへば、富める人は、富の徳を以て救ひ、軀の、たつしやな人は、からだで助け學のある人智慧のある人、その外一藝一徳あるもの、おのゝくに應じて、心をつくし、身を碎きて、互に救ひ合ひ、助け合ふほど、頼母

しい、よろこばしいものは、ありません、殊に病になやめる人の介抱をなし、親兄弟のない、孤兒を育て、年老いて、たよるものもない人たちを、始め種々様々の不幸災難に、をちいりて、涙にむせび、歎きに沈みたる者の、蔭にもなり、ひなたにもなり、心の届くかぎり、力の及ぶだけ、届かして、是等の人を慰め、いたはり、相談對手となり、その人の爲に、つくすといふことは、まことに、善い行ひであります、すべて、親切のあるなし、人情の厚い人か、うすい人かといふことも右の様な人に、心から、眞實をつくすと、つくさぬと、運ぶと、運ばぬとを見たら、よくわかるもので、あります又人の心に深くにかんじるのは、嬉しい時よりも、悲しい時、順にゆく時より、逆の時に、ひどく感じます、なぜかと申と、不幸にあふた時の心は、水の底に沈んだ様な心、やみ夜に燈火を、うしのふて、迷ひ居るのとおなじことであ

りますから、とういふ時の心は、身も世もわすれ、あとさきも、わからずに、心は亂れてをる、とういふ時に、眞實親切な、人がいるのであります其親切な、やさしい言葉やその眞實の人の、涙ぐみし眼が、悲しい人の眼にはどれ程、美はしう、見えるか、又ねんどろに、慰めてくれた其詞が、どれ程、不幸者の耳に、うれしく、響くか、譬へること、出来ぬ程の、うれしみであります、喜びであります、其親切な人の、顔の光りは、活きた神と、拜まれ、その信實な、やさしい言葉は、神の御聲と、響き、その與へてくれた品物は、死かけた病人がいきかへる、神薬を、もらつたと同じことに、ありがたく、思はれ、嬉しく感ずるのであります、それはその善であります、わが爲に、苦痛をとりのけて呉る、神である、捨てられし吾が身を、拾ひあげて下さる、救の神であるから、喜ばずには居られぬ、嬉しう思はずには、

居られぬ譯であります、本人ばかりではありません、側からみても、又其話をきいても、其人の心、其人の行ひの、美はしいこと、慕はしいことは、何とも云へぬ、心地がして、共にうれし涙がでる、ありがたくなる、獨りと、頭が下がる、おのづと拜まねば、ならん様になる、それで、この時は、もはや、先きの嘆きは、温かな愛のために、救はれ、沈みはした、ほどの、思ひは、情ある行ひに、浮び上り、喜びとかはつて、満足と、歡喜との、楽しい心になつて、救はれてある、其人の軀は、人並のからだであるけれども、其心の眞な、其行の善い、其言の美いことは、神であります、この様な御方が、祈禱したなら、天地の神々は、直ぐと御聞取り、下さるてありましよう、この様な御人が、することなすことは、直ぐに、人の手本となるてししよう、この様な人の話には、神は口を借つて、神の思を御聞かせ下さるてししよう、

この様な人が考へられたなら、神は言はず、語らず、無言のうち、神の御心を、其人の心に、おつたへなされて、よい考へを、お與へなされるに、ちがひありません、昔から、至誠は、神の如しといふてあるのは、このことである、深く味はふべきこととあります、あゝ救ひなるかな、助けなるかな、人々皆此心を、心として、互々に助け合はゞ、神國を實地に、あらはして、どれほど、たのもしい事でありましようか、そうさへすれば、天地の神々は、十分に其まごころを、お受取り下され、御守り下さるから、御代はなほく開け進み、五穀はよくみのる、商工其他の業務は、いよく盛んになつて、立派に、萬國の上に立つことおでき、花の御國、文明の國と、うたはれるやうになるから、これほど頼母しいことありません、われも人も、皆々、ともに、手を取り、心を合せて、進まねばなりません、

○幸福をのぞむ者

眞の幸福を、得たいとおもふ人は、神のましますところ、靈魂の死なぬことを、知つて、いつも善い心、善い行をせぬなりません、

○神の子孫

われも人げんは、神の子である、たましひは、神のわけみたま、軀は、神のかしもの、住んでゐる國は、神のお造りなされし國、着るもの食ひもの住みかなど、一さい萬物、みな神のたまものと、ないものはありません、神のおかけを、うけぬものはありません、この神より授けられ、神よりあたへられた、靈魂なり、軀なり、衣食住なりによりて、人となりたるもの、此身すべし、神となりうるものであり、それ故、神の心、神の行なく、只我さへよくば、人はいかになりゆくも、辨はず、道ならぬ、あしき心をもち、あしき行をなして、實に淺聞し

い人げんの、多いのは、なさないことではありませんか、親たる神祖先たる神は、世の爲め、人のため、即ちわが子の爲めとして、幸福をあたへ、夜となく、晝となく、只の一分間の、休みもなしに、いつも、おはらず、御守下まつてあるのに、人げんは、其萬一の、御恩も思はず、慾や、我慢や、腹立、不足、小言、陰口など、云ひたいまゝに、云ひちらし、したいまゝに、仕通し、氣まゝ、我まゝに、暮して居る者が多い、實に勿體ないこととあります、罰あたり、冥加につきる仕方であり、親たる神は、何も、恩をせがましい事や、おれがこうしてやればこそ、おしおあゝしてやればこそと、おぼし召すこともなく、まして、世界多くの子供を、いぢめ、くるしめなさる様な、ことはいかゝかなら、また、禮をいはぬから、守らぬ、拜まぬから、助けぬ、供物をせぬから、聞かぬやらぬと、思召様な、ことは、いかに

かない、依估ひいきなさることも、わけへだてをなさることもない、
 廣いぐ、大きいぐ、御心で、世の中の多ぜいを、お助け下さるの
 てあります、その中に、自業自得で、嘆きにしづみ、悲しみにむせび、
 暗いところへはまり、谷底へをちこみ、我とわが身を、をとしいれ、
 はまりこむのでありますから、そういう人は必ず人を、怨みるてはな
 い、神をうらむてもない、我身をうらみ、我が心の、あしきを、悔い
 改めて、神のみ手に救はれるやう、光明のさす方へ、手引して頂くや
 うに、せねばなりません、濁つた水でも、こせば澄む、反古になつた
 紙でも、漉返へしたら、また使はれ、錆た刀でも、研けば切れる、毀
 はれた道具でも、手入れすれば、二度役に立つのであります、神の子
 たる、我々人間が、一たび過つて、罪の人となり、汚れし、身となつ
 たとして、改めて、もとの、うつくしい心になり、神の子たる、よい人

と、なられぬ事はない、神は改めてさすれば、御許下さるのである、
 あらためて、善い方に、進むなら、手を引いて、御通し下さるのであ
 る、年久しく、悪をなし、罪を重ねた人でも、十分あらため、善心に
 立ちかへつて、悪につよかつた心を取りかへ、善につよくなつて、つ
 とめたならば、一つを十にも、百にも、千にも、萬にも、受取り下さ
 つて、ふるい罪は、ゆるして下さる、しらずぐに、をかしたとがは
 けして下さるのであります、一どをかしたら、助けぬ、悪人であつた
 から、もはや、子とはせぬ、近づけはせぬとは、仰せられませんが、あ
 り罪ある人よ、科ある人よ、不幸を嘆く人、沈める人、悔める人、身
 のおき處なき人、病める人、死にせまりし人よ、憐み深い、天の親に
 救はれよ、慈善に富み給へる、愛の神にすがれよ、そして、神に負は
 れ、神にいだかれ、神に手をひかれ、神の膝に、神の御前に、助けら

れて、安心の道、立命の境、たのもしい此世、幸福多い、あの上を、
 神と共に渡れよ、さすれば、親たる神は、およろこび下さるのであり
 ます、人げん心の、小さい心をやめて、大きい、廣い、海の様な、御
 心の神に、もたれよ、愚痴や、不足をやめて、悦ばしい心となり、神
 のみむねに、叶へよ、金がない、着物がないと、嘆く心をやめよ、世
 の中の、一切萬物は、みな神のおつくりなされたもの、食物がない、
 住所がないと、くやむ心を取りかへよ、鳥獸蟲魚草木に至るまで、み
 なそれ／＼に、生きとし生けるものには、いり用のものは、あたへられ
 てあるをおもへ、まして、萬物の長として、此世に、生れださして、
 下さつた人げんが、餓え凍えをなし、路頭に迷ふといふ様な、ことは
 ない筈、人たる道を、つとめ勵まば、分相應の、福分は、おあたへ下
 さるのであります、先きを取として、必ず苦勞を求め、氣病みをする

のではない、病に苦しむ人よ、神にもたれよ、神にもたれて、心丈夫
 に思ひ、けなげなる心をおさむれば、神のお守りにより、よき醫師に、
 引合せ、診察を誤らぬ様にお守り下され又早く癒ゆる藥をも、もらし
 め、滋養となるべき品をも、口にせしめ給ひ、限りある命をも、生き
 延びる幸をも得せしめ、給ふことを思へ、貧にせまる人よ、貧は、反
 つて、汝の身だめなる事を、忘れてはなりません、貧なれども、富め
 る人でも得られぬ程の、身の健康と、子寶とを、多く授けられてある
 不自由とおもふゆゑ、不自由である、心を取りかへてみられよ、世の
 中に、富みて、米麥は、千萬石を積みてゐながら、日に一合の粥さへ、
 咽をこさぬ人もあるをおもへ、金は千萬圓を重ねながら、年中、病室
 にこもりて、金は有つても、有る甲斐もないので、身は貧でもよい、
 健康になつたらと、貧でも、たつしやを、うらやむ人も、數々あるを

おもしろ、着物、住所、何れかもの、十分にありながら、つかう事も、着ることも住むことも、出来ずに、居る人の、澤山あるを、おもしろ、世の中は、妙なものの、其日暮らしの人でも、飢にも凍もせず、心たのしく、暮すかとおもしろば、米が澤山あつて、飢にる人もあり、金はあり餘つて居ながら、それが使はれぬ人もある、それをおもしろば、心誠に、身の健康なる人の、楽しみは、金や、米や、其外の、財寶に、まさるること、萬々である、家も立派、別荘もある、財産もある、召使ひもをる、表面から見ると、なるほど、うらやましい、ほんに此内は、睦じからう、いかに、楽しいことであらうかとおもはれ、此世の長者、大福者と見えるが、さて、みかけには、よらぬもの、内にはいつて見ると、主人は、我まよ、氣まよ、それで、家内中大閉口、酒を飲みすとし無理をいひきげんの取やうのない人、それのみでなく妻をいいて、それ

が爲に、罪をつくり、家庭は亂れて、親子の間、夫婦の間に、喧嘩、物言ひの、絶間なく、妻は氣を痛めて、始終病身となり、息子は、親に習らひて放蕩をなし、訴訟やら、親族會議やら、いろいろさままぐ、云ふに云はれぬ、修羅道を演じ居るあり、又財産は豊てあり、多額納税者で、地方に名も知られ居る、家柄であるに、慾に目がくらんで、收賄とか、横領とか、詐欺とか其ほか、恐るべき罪をかして、親、親族の顔をよどすもあり、一女擧ぐれば、限りもない程にて、實に思まはしいことが、數々あります、これに引かへて、貧しうても、清い心、あたゝかな心で、親子、兄弟、夫婦が、いつも睦じうして、善いも悪いも、幸も不幸も、皆共々に、力を合せ、心を合せて一心同體で日々を務めはげむに比べてどちらが頼母しいことか、どちらが嬉しい事か、よくよく思ひみるがよい、人々みな、身の分限を、わきまへて、

つとめる事を、つとめ、勵むことを、勵み、罪はつくらず、愆もせず、
 神の御蔭、 天皇陛下の、おかげと、喜び暮す人の、奥ゆかしいこと
 たのもしいことは、言葉につくせぬ、筆にもかけぬ、御覽なさい、膳
 にそなへられた、食物は、粗末でも、心のまことはこもつておる、鳴
 物の音はなくても、膝つき合はして、隔てなく、快く言葉をかはして
 悦ばしい心が、顔にあらはれてをる、若し病氣にかゝれば、親子、兄
 弟、夫婦、互に人手をからずに、信實に、介抱をし合ふ、其心丈夫な
 事は、云ふにいはれぬ、醫師は、厚き同情を以て、薬をもつてくれ、
 友達は、まごころから見舞ってくれる、神の愛も、人の同情も、あつま
 る、それだけでも、命は助かる、壽命はのびる、災ものおれる、神の
 心に叶ふて、神たる人間、活きたる神の、修行は、日々月々年々てき
 て行く、善心善行を、すると共に、罪は消える、徳はつまる、どうて

も、こうても、神の仲間へ、入らねばならん、やうになるのでありま
 す、こういふ様に、だれもかれも、みな、此心がけて進むなら、神の
 御國、神の子、神の孫と、いはれる様に、たしかになつてまゐります、
 吾々日本人は、皆心にかけて、進まねばなりません、

○立ても居ても

立ても、居ても、本を讀んでも、字を書いてても、仕事をしてても、物を
 見ても、聲をきいても、物を言ふても、進んでも、止まつても、我は
 神の子である、神の孫であるといふことを、少しも、わすれては、な
 りません、

○悦びと悲み

悦ぶ心は、福をまねき、悲しむ心は、禍をよぶ、

○健康は第一の寶

いつも心に、神を宿してゐる人は、清く、明く、直く、正しくあつて、物をみれば、善いわるいが、はつきりに見ゆ、聲をきけば正しく、きくわけられ、物を言へば、言ふことが、清く、正しいのであります、それで、爲ることが、立派で、人のかゞみ、手本となり、側の人が、それに見習ふて、皆よくなる、一人の善い心、善い行は、只一人にとゞまらず、多くの人の、ために、なるので、ありますから、自分一人の、まことは、直ぐと、家の和合となり、家の和合は、その所の榮は、所のさかえは、國の光りとなる、わけてあります、

そして、いつも、神の心をさめてゐる人は、心が、まこととてありますから、顔に光りがあつて、いつも、活々してゐるから、側に見てゐても、氣もちがよるしいのである、いつも、いきぐしてゐる心が、

をたつしやにする、本となつて、病はなく、いつも、楽しんで、暮らされ、よろこんで、働かれるのであります、かやうに、軀がたつしやなから、心は猶々勇ましくなると、いふわけで、心も、身も、ともに、さかえるのであります、すべて、物事を、楽しんでする人は、心も、身も、活々として、目に見えて、進み、物事はよく出来るのであります、たつしやは、まことに、何よりの寶でありますから、誰れても、この寶を求めねばならぬのであります、健康に、ない人は、生涯の幸福を、我が身から取りのけられたのと、同じこととてありますから、銘々に、心の濁りをすまして、清く明く直く正しき心になつて、神をやとし、神の光りを受けて、たつしやといふ、此寶を、神よりもらわねばなりません、此寶の、みちてゐる家には、いと、いつも、氣もちがよい、心がうれしうになる、それで、少々氣分のわるいのや、頭の痛いのは、直

ぐに、癒る、今までの不足、不満の心も忘れてしまひ、一時間ほどとおもふて、訪問たつものところ、つい半日も快い中に、話しがはづみ、一夜泊りも、三日となり、内々愉快に、和合してゐて、こゝろよい、もてなしの徳に、引きとめられるのである、うはむきの交際、義理からの、馳走や、もてなしではない、眞實ま心の、笑ひやら、談やらが何よりの、馳走で、あります眞實の言葉は、神の聲と、ひゞき、親切なゝ、行ひは、どうしても、神の愛としか、思はれんのであります、そして、内々皆そろふて、たつしやなのは、ほんに、甘露や、神薬をして、神よりいたゞいて、長生する人といふてよい、實に喜ばしいこととあります、これも心一つで此よるこび、此たのしみを、受けられるのであります、そして絶えず活動く人は、天より賞せられて、いつも、たつしやなので、あります、

○濁つた人より清い人

濁つた心の人と、十日遊ぶよりも、清い心の人と、一日暮す方が、おもしろい、正しうない人に、譽められたよりも、誠の人に叱られた方が、ありがたい、變りやすい人間を、力にするより、いつまでも、かはらぬ神に、たよつた方が、なにほど、安心かわからん、

○神信心

信仰のうすい者や、信心をせんものは、神の存在ことが、わからぬ、わからぬから、無理なことをする、又時によると、ひどく、力をしをする、神をしらぬ者は、恰親のない、子の様なもので、たよりない心細い、それで、すこしのことでも、悲しみ、嘆く、思ひやりも、あきらめも、つきにくいから、自然と、うたがひ、迷ひ、そねみ、ひがみ、ねぢけ、ぐち、小言、不足が、てやずいのでありますそして、何

事でも、よう恐れます死ぬるのを恐れ、損をしては恐れ、病氣を、を
 それ、苦勞を、をそれ、不幸を、をそれ、あつい寒いを恐れ、億病者
 となつて、心は、小さく、氣はむすぼれ、ヒステリーになつて、あは
 れ、はかない、境涯に、をちこむので、日の光りをうけぬ、草木の、
 ひよろしくして、色も、つやもない、花も實もつかぬと、同じことと
 あります、神の光り、神の恵みを、しらぬ人の、心のうちの、たよりな
 いこと、心細いことは、實に、氣のどく千萬であります、みなさんは
 神の温かな、廣い厚い御恵みを頂き、あふるよばかりの、愛に救はれ
 て、起きて働くも、神の御力をかり、床について眠むるにも、神の御
 手になてられ、幸福の多い人となつて、楽しみ、いさみて、此世を送
 られよ、そして、たつしやな軀で、長生をなし、御代の恵を、よろこ
 びて、敬神愛國の、良民として、此世の本分を、つとめられよ、此世

て幸福な人は、死んであの上へゆくも、幸福であります、此世の幸福
 を、みやげとして、死なぬ靈魂が、もつて、ゆくのでありますから、
 誠の心、善い行を、數多くするほど、靈魂に、徳がついて、あの上へ
 の土産が、多くなる、あの上への土産が、多ければ、あの上の幸福が
 多いので、あります、信仰厚き人は、幸福である、神にもたると人は、
 幸福である、此幸福な人は、日々滋養を食せずとも、たつしやになら
 れ、分限者よりも、安氣にくらされ、學者とならずとも、早わかりに
 道をおさめられて、此上の楽しみは、外にはありません、若いものは、
 厚い信仰のもとに、元氣よく働き、年よりは、神にもたれて、心丈夫
 に、うけたぐけの、天命をたのしむことが出來物の有る者も、無いも
 のも、男も女も、神信心といふ、光りて、何處の、何國で、何時、ど
 んな事が、あつても、どんなことに、てくばしても、此信心、此信仰

此神だのみの光りて、神のまします處を、すぐ、目の前に、見出して、大丈夫、大安心が、てきるのでありますから、此信心の光りを、失はぬ様、此光りを、消さぬ様に、めいくに、したいものであります、この心、此光りが、消けて、なくなるとくらやみに、なるのである、くらやみになるから、迷ふのである、迷ふから、此世が、いやになる、いやになるから、やけもおきる、むちや苦茶もする、はては、死にたくなつて、あさましい、ことを、するので、ありますから、こんな、いやな、つまらぬ方へ、ふみそこなはぬ様に、信心の、光を、いつも心にともしして、明らかかな、御世を明らかに通らねば、なりません、此光を失つたら、瓦斯燈も電氣燈も、間にはあひません、極大事な、光てあります、此光を、どうかすると、迷ひの風で吹きけしたり怒の雲で、くもらしたりする人が、多いのでありますが、どうぞ、光

を失はぬ様に、せねばなりません、

○感心上手

感心上手の、行下手が、多い、口で返事をするよりも、行で證據を、見せてもらひたい、

○活きよ

あきらめのつかぬ人は、自分の心を、自分でせめ、廣い世の中を、せまうにし、暗らい方ばかりを見て、明らい方は、目をふさいてをる、誠に氣の毒なことであります、心が陰にをちてをるから、光りも照らず、風も通らず、濕氣地も同じ様で、ハイキンや、疫病神、悪魔や、貧乏神、死神の、待合所と、せらるゝ外は、ないのであります、それで、罪をつくり、悪を考へ、怨み、腹立ち、嫉みなど、いろくの、悪いことを、思ふたり、爲たりして、自分で、自分に監獄をこしらへ

て、それに入り、始終心の裁判官に、責られて、苦痛に泣き、煩悶に叫び、いつも心の拷問にあふて、とうとう病氣で仆れるか、但しは、狂氣になるか、水にはまるか、汽車にしかれるか、ピストルか、又に、命を落す様になつて、見るもあはれ、聞くも涙の種となり氣の毒な人が、世に澤山あります、自分に罪を犯して、罪にはてる者は、自業自得で、致方ありませんが、そうてなく、心の小さい爲め、思ひきりのつかぬ爲め、又はいきつまつた心を取りかへぬ爲めに、心をせめ、身をいためる人は、實に氣の毒であります、こういう人を、救ふのには、どうしても、神の教でなくてはならぬ、神の教によらしめ、そして、清き心の水を、胸にたよへ、明かき燈火を、心に點し、喜びの血を、軀中に通はし心も身も共に、活々させねばならんのであります、心が活きると、すべてが活々するから、光はさす、風通しはよくなる、陰氣

は去つて、陽氣となり、前のハイキン、疫病神などの、待合所たりし家も身も、美はしき、神の園とかはつて、花は咲き、蝶は舞ひ、泉水は流れ、木々の縁は滴るといふ様になつて、頼母しい喜ばしいことになら、そこで、卒く生れかはつた人と、なることが出来る、昨日迄、罪深き、思ひばかりしてゐたを、今朝は、あらひ流して、新らしい人となり、心うれしくなつてをります、そうなると、今までとはちがひ、どの人を見て、善い人である、親切な人である、わるい人としては一人もない、又何をきいても、楽しい、喜ばしいばかりである、そして、一日一日と、今日も結構今日も無事と、くらししてゆく、此世の中が、まことに住みよいのである、暮しよいのである、今迄悲しみの涙ばかり、ながれてゐたのが、今度は、よろこびの涙となつて、くるのであります、多くの人が皆此心になるには、どうしても、神の存在ことを、

よく知らねばなりません、神のお守り神のお力が、わかつた人は、屹度自分の心が、堅固になつて、物事を成し遂げるにも、此世を渡るにも、どれだけ、大丈夫かわかりません、世の人よ、自分の息の絶えず、通ふてゐる様に、神の御力、神の御恵は、人間のみでなく、一切萬物に届いてゐるのであるといふことを、承知せられたいのであります、

○心通り

清い心の人、清らかな言葉がいて、眞實の人の口からは、いつも温かな、言葉がでる、心通りである、

○足下が肝腎

人のよしあし云ふより、自分のよしあしに心をつけ、人の取沙汰するよりは、各自の及ばぬ處を補ふがよい、兎角足元が、かんじんである、

○顔は看板

紅白粉で、みめを飾つても、心がうつくしくなければ、何の詮もない、飲食物衣服で、容貌を美はしう、變化そうとするよりも、心も身も清淨にした方がましである、心がもとであるから、心になしみあれば、顔にあらはれる、すべてのことが、その通である、包み兼ねるのば、思ひである、顔は精神の看板である、廣告であるから、人が皆しる、正しいも、邪なるも、怒りも、怨みも、一切の思ひを、顔といふ店に、並べたて、飾りつけるのである、から、邪な心をもてば、實に耻しい次第である、

○施した者は忘れ受けた者は忘れな

大抵の人が、恩きせがましい事を、よく云ひたがるもので、わしが、某を助けてやつた、おれが、誰それを救ふた、あれは内て世話をして

やつたと、兎角恩にきせる人が多いのであります、こういう人は、自分
 分が、人の世話になり、恩を受けたことは、一つも言はぬもので、そ
 して、こういう人に限つて、表面をかざりて、いつも、人がどう思ふ
 てあらうか、人があゝ言ふであらうか、などゝ人の思ひばかりに、心
 を苦しめて、何でもない、苦勞をするものであります、一體人間は自
 慢心があつて、虚榮にながれるものであります、神は一切の物を、
 お造りなされ、多くの人を、むかしも今も、これからさきも、永く御
 守り下さるのであります、恩きせがましいお心や、そぶりは、いさ
 さかも、なさらぬのである、人間も少しの恩を、施して、慢ずる様な
 心は、取りのけたいものであります、おれが助けると思ふから、恩に
 きせし、禮も受けなくなるから、神が此つとめを、さして下さると
 思ひ、又前々より、生れかはり、死かはりして、互に助けたり、助け

られたりした、深く契りのある、神の子たる、我々兄弟が、又此
 世で、世話にもなり、恩返しもして、前々よりの返禮をして、おると
 思へば、何も恩に着せることは、ありません、世話をして、恩にきせ
 るは、其人へ、千貫目の、重荷を負はせると、同じことであると、或
 人も云ふておりますから、必ず恩にきせぬ様に、することが、第一で
 あります、然れども、恩を受けた人は、其恩を忘れぬやう、又恩返し
 をする様に、心がけることとあります、つまり、施した者はそれを忘
 れ、受けた者は、忘れぬ様に、するのであります、

○神に愛せられよ

不義の富を、うらやむな、一時の榮華を、よろこぶな、貧に安んじ、
 清き心と、善い行をして、いつまでも、神に愛せられよ、

○神にもたれよ

室内の空氣が、けがれたなら、新しい空氣を入れ、水も腐敗したら、清らかな水と、かへるがよい、それと同じ様に、人の心も、活々とした新らしい、思ひが、満ちておらねばならぬから、其日々に、神より新な、靈を、我が靈に、そへて、頂く様にせねばならぬので、あります、草木が年々新な芽を出して、伸びるやうに、なけねばなりません、始終神に、もたれ、ついて、神と我とが、一つとなるときは、常に、水道に、水の通ふつておるやうに、神の靈は、我が靈に、そひたまひて、いつも、活々とした、新らしい、思ひを以て、天より、いひつけられた、務を完ふにつくすことが出来ます、それに、世の人は、そこに心をおかずして、神と我と、離ればなれになつてゆくから、丁度水道の鐵管に、さはりがてきた様に、又電信の線が、途中で、切れたと同じ様に、

神と我との、間に引かれたる、心の管が、ふさがり、思ひの線が、切れるから、水がとまつたり、又電信が、不通になると、神の靈と、我が靈との、交通が絶えてしまふのであります、それを、切るのも、又絶つのも、神よりは、決してなさらぬが、みな、我々人間が、切るのであります、絶つのであります、神の守、神の引立て、神の愛、神の導を、失ふは、皆めい／＼から、失ふのであります、親より子を隔てたのではない、子が勝手氣儘に、家を出たり、親にそむいたりしたのと、同じこととあります、神をわすれるやうな、心の人、自然と、生みの親を、忘れ、祖先を、忘れるやうな、心であれば、自然と、生みの親を、忘れます、親を忘れる、不孝者なら、必ず君の恩も、國の恩も、忘れてしまふに、ちがひありませんから、心すべきこととあります、

○吾が靈魂

吾々の、靈魂は、その本は、むすびの大神から、授け下さつたものであるから、神と一つの、立派な、靈魂であつたのであります。それが、此世に生れて来て、だんく年たつに、つれて、愆やら、我まんやら、うらみ、はらだち、などの、爲に、心行ひがあしくなり、それが、ために、よき靈魂を、あしくし、徳のある靈魂を、罪あるものに、自分で、したのであります。猶又幾度も生かはり、死かはりするにつけて、徳を増した者と、徳を減らした者と、善を行ふた者と、罪を作つた者が、できて、種々様々に、段階がつく様に、なつたので、あります。徳をつんで、靈魂の、ぬうちを、あげた人は、よろしいが、汚したりいやしくした人は、神より授けられた、本の尊い、たましひ、清いたましひ、靈妙なるたましひに、することが、肝腎であります。

人は死ぬると、花おちて、根にかへるのと、同じやうに、其靈魂は、神のみもとへまわり、神の御はからひに因つて、冥府の政をうけるのであります。その政大約、七つあります。一つには、清くすみて明かな、高天原の、神のみもとへ、のほらしめ給ふ、二つには、功のあつる神として、正しき神の、つらに入れて、永く幸福をえせしめ給ふ、三つには此世にて、神とあがめまつらしめ給ふ、四つには、再び此世の人と生れしめ給ふ、五つには、妖神として、まがくしき、神のつらに入れて、言ふに、言はれん、苦しみを受しめ給ふ、六つには、鳥畜魚虫などに、生れかはらしめ給ふ、七つは、凶目きたなき、夜見の國へ、追ひ逐ひ給ふのであります。

それで、神の教をきき、神を信ずる人は、いつく迄もよく、神の教を守りて、功を立て、徳をつみ、何處のいづくに居て、何をしても、

誠の心をはなさず、ねても、おきても、自分の靈魂を、天つ大神に、くつつけてゐる心持で居るがよい、そういふ心で、いつもおれば、我のたましひは、清く尊くなつて、大神の靈と、一つになるのであります、

○命の延び縮み

何事でも、よい方に、悟つて、喜んで暮す人は、定命よりも、生きのび、物ごとを、苦にして、泣いてくらす人は、壽命を縮めて、早く死ぬるのであります、

○眞の交際

いつも、我が心を、清らかな、水の様にし、又とぎすました、鏡のやうにして、ゐて、うつくしい、よろこばしい、心で、家内中は申までもなく、隣り、近所、親類、友達、までも、氣もちよく、心もちよく、

交際したいものであります、花を見ると、しらずくには、心が長閑になり、月をみると、思はずも、心はれぐすするやうなもので、物言はぬ花が、よく人をよろこばし、又心をどこかにするのであります、月もその通り、その外萬事、みな同じ譯であります、心の澄んでゐると、濁つてゐるとで、人々の心を、よろこばすと、心配さすと、すかれると、いやがられると、他へ感化をおよぼすことが、大へんなことでもあります、これは、小さい様で、大きいのであります、世の人は飲食のために、交際をしますが、飲食のためにつきあふは、心がひくいのであります、誠のつきあひをなし、眞實の心と心の交り、趣味とか職業とかいふ上からの交りが、第一であります、

○濟まぬこと

睦まじう、暮さにやならん、家庭を、喧嘩場にしてゐる者があります

が、神に對し、祖先に對して、すまんこととあります。

○威徳を一にす

身分の上下、學問のあるないに、かゝはらず、人の本分をつくし、立派な徳をつみ、安心立命も出来、人柄をあげることででき、早わかりのする神の教があります、此神の教は、別にむづかしい事はありません、斯道に入り、この教をきいて、之を守らば、直ぐと、樂しうに、面白うに、心をみがゆれ、悟りもつき、御利益もわかり、徳もつめるのであります、そして現世幽世の、助かることも、救はれることも、よくくわかるから、今までは、なぜ世の中を、かなしく思ふたであらうか、なぜ心細く暮したのであらうか、どうして、怨のためにとりことなつて、金より外に、寶はないと、思ふたのであらうか、衣食住の外に、誠の道を求めるといふ、この樂しいものゝあるに、氣がつ

かなんだのであらうか、軀よりも、まだ大切な、靈魂のあることを、おもはなんだので、あらうか、我れが、おれがの、我ばかりを、通ふしぬいて、ありがたい、神の御坐ることに、心づかなんだので、あらうかといふ様に、判然と、我が心に、はまつて来て、日々に、神の御蔭を、自分に悟り、ありがたいと、嬉しくなつて、益々善い事を考へ、よい行ひをなして、人を助け、人をみちびき、世の爲、人の爲めと、眞の道理に、叶ふ様になり、天徳天爵を、つみかさぬるのが、何より樂しみであるといふ様に、進んでくるのであります、それも、義理立てや、人のてまへを、かざる爲や、名をもとめたり、返しを、のぞんだりする心は、いさゝかない、どうでも、人間として、此世に生れてきた、神の子、萬物の長たる、人間としてどうしても、眞心よりせねばならん、行はねばならん様になるのであります、そこが、神の教、

斯道のありがたい、處であります、そうなると、今迄は何もしらずに
 只無學の人、無財産の人と、さげしみてゐたが、まことに、感心な心、
 天晴れな行ひである、自然に、だれ云ふとなく、だれに聞いたとい
 ふてなしに、真心の光り、眞實の行の花が、人の目につく様になる、
 それがよい手本、よい鑑、よい模型となるので、野に咲いた百合が、
 床間に上られ、山から堀てきた、蘭が、美はしい鉢によい香をはなち
 て人を喜ばす様に、なるのと、おなじ様になつてまゐります、こうな
 ると學のある人、資産のある人、身分のよい人、家柄のよい人は、猶
 更おつとして居られんのである、わしは上流じゃ、おれは貴族じゃ、
 おれは學者じゃ、金満家じゃと、思ふてゐて、下等社會、貧乏人、無
 學文盲とばかり下げしみては居られん様になる、一寸外から見、形の
 上からは、上等と下等金満家と、貧乏人、學者と、無學と區別がつく

様でも、形の無い財産の、天徳とか、天爵とかを持って、山の中にひつ
 こんでゐる人もある、蘭の様に芳ばしい人がある、眞實、眞心清淨潔
 白な人が、草茫々と茂つてゐる、野に百合の花の様に、咲いてゐるの
 もある、其心のうち、其見えぬ處の徳は、神より外には、誰も知る人
 はない金の光りが、道徳よりも、人の目について、よく光る間は、誰
 もしらぬが、眞の文明に、近くに從ふて、眞の徳が、あらはれる時節
 がきます、そして、老人も、若い者も、だれもかれも、天徳天爵とい
 ふ方へ、志す様になりますから、人々の品性が、ずつとあがつて、國
 の光りは、益々輝く様になつて、よその國々が、みな我が日本の國を
 慕ふて、祖國として、子の如くにあつまり來て、神の恵み、君の恩を
 うたう様になるのでありますから、わしは智恵がない、學問がない、
 徳がない、金がないと、いはずに、みなく神の教をきき、神の道をお

さめて、だれもかれも、皆徳を一つにせねばなりません、
 又わしは、年寄で先きがないからと、いふてない、一年生きておれば
 一年二年生きのびておれば、二年だけ、只の一日でも、善い心、善い
 行をして、後を繼ぐ若いものに、よい手本を示し、よい導きをして、老人
 は老人としてのの、つとめをなし、一つなりとも、此世へ置土産を遺し
 置くと共に、又死んでゆく、先きの世へ持ちゆく、土産をこしらへる
 と思ふて、務めねばなりません、年寄に其心あらば、若い者は大に勵
 まされて、共々に天の仰せ、神のいひつけを、全うにすることが出来
 るのであります、教育勅語にも「威其徳チ一ニセンエトチ庶幾フ」と
 仰せられてありますから、此大御心を、心としてみなく、徳をつまね
 ばなりません、

○自由をゆづれ

人に自由をさすかはり、自分は不自由をこらへねばなりません、

○徳を積み

神より我に授けられた、靈魂をみがき、おさめ、之を活動かして、世
 のため、國のために、つくさねばなりません、國家の爲に十分つくし
 つくす、その功能をつみかさねていく、これが、いわゆる、徳を積の
 であります、その徳をつむにも、現と幽とある、人の目に見ゆる徳と、
 人の目に見えぬ徳、即ち幽の徳、世にいふ陰徳である、現在人の目に、
 立つ徳よりも、陰徳の方が、一段尊いのであります、昔からその陰徳、
 かげの働きを、重いとしてある、今いふ、徳をつむと申は、何れでも
 よろしいが、可成は、陰徳を、十分に積みたいものであります、すべ
 て、徳をつむには、うはべの愛や、人の見へを飾る行ひや、恩きせが
 ましい世話などは、眞の助けでない、眞の愛でない、眞の徳は、一切

のことが、眞實より出るのでありますから、美しい、清いのであります、その美しい清い心行は、どうしても神の心を心として、したのではないと、美しいうない、清らかなないのであります、今それについて、一言申してみましよう、

神は萬物をお造りなされて、一切萬事の、御守なり、御恵みなり、言ふに言はれぬ程の、廣大無邊な、御徳をおもちなされてあるが、人間の様に、おれが、わしがとも、あゝしてやつたから、こうである、こうしてやつたから、あゝである、思召す様な、ことは、いさゝかありません恩にきせて、どうこうといふ様な事はみぢんもありません、そのどとくに、人も段々誠が進み、眞の愛、眞の助けが、できる様になると、神と一つの心、神と同じ思ひとなつて、助けるも、救ふも、世話をするも、何をすることも、眞實の愛より出るので、何とも、かとも、云

ふに云はれぬ程の、美しい、清らかな、徳が日に月に年につめてゆきます、自分は徳をつみたいと、思はいても、おのづと、積めてゆくのであります、人の目に見えぬ徳、人の耳に聞えぬ徳が、積めるのであります、神は見通ふし、聞通ふし給ふのでありますから、大きいも、小さいも、蔭でも、日向でも、どこで、どうして居ても、皆御承知であるから、神の目、神の耳、神の心に、受取られ認められてある、そしてその認められた徳は、又その清い心の人、愛の満てる人の、靈魂に、神より日々月々年々に、授けて下さつてあります、それが時節が來ると、花が咲き、實がなる様に、現はれてきます、それで、人が驚く様になり、賞める、感心するといふ様になる、大徳の發現はれた時は、天地をも動かす、萬人をも感心さすのであります、これは其人の誠と、神の力とが、一しよになつて、あらはれるから、普通の學

者や、道徳家、政事家、宗教家などの、及ばぬ、大徳が、神の厚い保護の
 もとに、あらはれるのでありますから、なみくの人の、考へにも、
 想像にも、及ばぬこととあります、そこでこういふ人が、世の中に出
 ると、忽ち世の中の、眠りを醒まし、沈んだ世間を浮ばし、悲しむ
 人を喜ばし、腐敗した、人の心を、清める、大徳の人、神と同じき人
 が出ると、世界が益々清く、明くなるのであります、こういう人が出
 るのを待つ、此日本から数々出るのを、希望するのであります、何人
 が、神の御心に叶ふ、美しい心をおさめ、天徳天爵を擔ふて、世界を
 清く、明く、直く、正しくする、眞の先達となる人でありませうか、
 目を刮つて見、耳を聳てよ、聞いてゐるわけとあります、

○積むも崩すもみな自分

徳を積むのは自分である、徳を崩すのも、また自分である、いましむ

べきは、我が心であります、

○本末を誤るな

あゝ吾々は幸福であります、明かな御代に生れて、大君の厚き御恩
 を受け、安らかに、此世を送つてゐるは、誠にありがたいこととありま
 すが、さて明かな御代でありながら、暗い心で通ふる人が住み、治ま
 った御代に、心も行ひも、亂れて居る、人があるを、思ふと、自分一
 人だけ、幸福であると、安閑としてゐる譯にいかんのであります、そ
 こで、吾も人も、共々に喜び、共々に進まうとすると、教もせねばな
 らん、話もせねばならん、そこで、くどい様でも又話し、煩はしうて
 も又書きしるし、共に手を取り合ふて、進うとする、心をくみて、目
 をも貸し、耳をも傾けてよ、

世の中の清いのを望み、治まることを祈るなら、どうしても、清い心

の人、善い心の人が多分出來ねばならん、我が身、我が家の事を忘れて、君の爲國の爲といふ、美しい心、頼母しい行ひをする人が、一人でも、多く出來、一日たりとも、早く其行をすることを、希望むのであります、それで、神の教、神の道が、四方八方に、行届いて、それから、敬神の念、崇祖の情が、振り起る、それから、吾々希望む處の頼母しい人が、多く出來るのであります、是迄に、神を敬はず、祖先を忘れて居た様な、有様になつて居たのは致方ありませんが、最早、天運が循環つてどうでもこうでも、神式に復して、神國神孫の、實を行はねばならん、時節になつてをります、畏くも我が大君は夙に國民のよるべき道を御示し下さつてあるを、下々がわからずして、舊いしきたりになづんで、のびくくのびて、來てゐるのであります、心ある者は、我が國體を、明かに悟りて、

敬神崇祖の、誠を致さねばなりません、正しい道をふみ行ひ、善きことをするには、遠慮も用捨もいらぬ、どしくと、進まねばなりません、一日も早く正しい神の道を踏みて、そして春風に色々の花が、野にも、山にも咲きてた様に、善い心善い行の神の道の光り、人の道の花が、四方八方に咲くことを、希望むのであります、これはたがいたがいに、勧め合ひ、勵ましあふて、必ずひけをとるてない、あとしざりするてない、前へ前へと、進むがよい、そうすると、神は、前に立つて、障りをのぞき、後について固め、右左の手を取り、頭の上を照らして、吾が進む便利を、あたへ下さるから、おそれる事も、危ぶむことも、安じることもしらぬ、安心して、廣い美しい、神の園に遊ばれ、誠の光明の、輝きてをる、幸福も、歡喜も、みちてをる、此世の高天の原へ進まれる、御世は開けて、何もかも進みてをるが、只獨

り、精神のみは、おくれておる、第一忘れてならぬ、神を忘れ、祖先を忘れておるといふは、恥しいことではありませんか、我が國の尊い教を捨て、他國の教のみ、學ぶといふは、本と末とを誤つた仕方ではありませんか、

○靈の働きは大きなり

徳のある人は、生きてゐる時より、死んだ後の方が、大きな働きをすることお、出来るのであります、軀の働きより、靈の働きが大事、目に見えた小さい働きより、目に見えん大きな働きが、肝要であります、死ぬると思ふ故、力がおちる、消えらるとおもふから、悲しむのであります、靈魂は死なず消えず、また失せずの、生き通してありますから、此世、あのよの、働きをするのであります、

○男女の區別なし

君の爲、國のために盡すに、男女の區別はありません、

○叮嚀親切

人に對して、叮嚀な言葉をつかひ、親切な行をするのは、實に美しい徳でありますから、誰れでも、これを喜ぶのであります、そのよることばれることをせず、嫌はれる横へいな、言葉づかひをしたり、不親切な行をしたりしますが、どういふものでありますでしょうか、叮嚀な言葉をつかへば、自分の價值が下がる様に思ひ、親切にしたら損をする様に、おもふのでありましよう、こういふ思ひちがひは、徳のない者や、力のない者、價值のない者に、限つてまちがつた考を持つものであります、それで、人が猶きらひ、いやがつて、しまひには、見むきもせず、近よりせん様に、なるのでありますから、必ず自分免許で、たかぶつたり、ひらばつたり、するものではありません、此心

をもつ人を、高慢とか、なりあがりとか申て、見上げられる處でなく、却つて見下げられ、いやしまれるのであります、

これとちがひ、叮嚀親切な人は、神には愛せられ、人には喜ばれるから、かういふ人は、幸福もえられ、安心もえられるのであります、周圍の人は、皆味方であるから、丁度堅い城を築いて、いろくの敵をも防ぎ、災をも拂ひのけてくれるも同じこと、祈らなくても、幸福をまし、願はいても、徳をつみ名もあらはれるのであります、

何ほど使ふてもつきぬ、此叮嚀親切といふ寶を、人々に用ゐることや施すことを、惜んではなりません、

○美しいものと汚穢もの

何が美しいと云ふても、私心のない、善い行程、美しいものはあります、すまい、何が汚穢といふても、吝嗇ほどきたないものはあります、

○活・動 け

手をつがねて、遊んで居るほど、心づるしいことはありません、忙がしう活動くほど、氣もちよい事は、ありません、

○靈魂と分靈

人は死ぬると、靈魂は、軀を離れるのであります、その靈魂は、直ぐ他所へは、参りません、やはり其遺骸を、したふて、その邊にをります、それで、遷靈の式ある時は、分靈を、靈壘に留め、送葬の時は、柩にそひて、墓所にゆき、こそへ又分靈を留め、本つ靈は、幽冥府の政にあづかつて、善惡徳不徳によつて、それぐ賞罰あり、神のみはかりに因つてゆくべき所へゆき、留まる所に、とゞまり、務むべきことを、務めるのであります、それで靈魂は、死んだものであつて、家々に分靈を、留めて御座るから、叮嚀にお祭りをなし、墓所へも参るので

あります、靈魂と分靈とを譬へてみると、こゝに蠟燭の火があるを、他の蠟燭へ、その火を分けて點しても、本の光の減らんのと、同じ道理であります、

○嘆くことも怨むこともいらぬ

理窟にまけても、實行でかち、権力で仆されても、眞實でおき、人に捨てられても、神に拾はれる心をおさめたら、嘆くことも、怨むこともいらぬ、

○愛を誤るな

世には、愛をあやまる人が多いが、愛をあやまると、毒を盛つた食物を、我が愛する子に喰はすと、同じ事になります、子の云ふまゝ、爲るまゝにしておいて、先きて、親が泣かねばならん様になるがあり、又連れ子をして、縁付た母親が、その連れ子の爲と思ふて、夫にかく

し、舅姑にかくし、眼をぬすみて、衣服をこしらへてやり、かすり溜の金をやるものがあります、その時は、よい様であるが、品物や金と共に、罪をそへて、かあい子にやる譯になつて、先きて其子が、不幸をうける様になり、又一つは悪事をする事を、親が教て居ると、同じこととて、此誤つた目先きの愛は、實に可愛わが子を、ひいきの引付きをしておるのであります、子を愛する者は、悪をため、善に導き、誠の道をふますのが、眞に子を愛する道を知つておる人であります、かあい子には、旅をさせ、かあいければ、きつくせよといひ、むちを加へるも、むどい詞を出すも、皆眞に可愛からであります、こかせば起きる、おこせばこけると云ふことがありますが、之は戒めたり、叱つたりして、こかすと、自分で奮發して心が起きて、役に立つ人となり、譽め過ぎたり、かあいがり過ぎ、おこし過ぎると、心がゆり、

自惚れがてよ、獨りと侍れて、役に立たぬ様になることがありますから、正しい道をふまし、眞の通り方を傳へて、神に引上げられ、人に愛せられる様にするのが、愛の大なるものであります。

○ 軀よりも心

世の人は軀をかざり軀を肥やすことをつとめるが斯道の人は心をかざり靈魂を肥やすことに重きをおく心をかざるとは精神の修養をいひ靈魂をこやすとは天徳天爵を重ねるをいふ、

○ 苦は樂の種

吾々は神を信じ、神にたよるからは、心も身も、神におまかせして、自分の力の、弱いのをかなしまず、才智の足らぬを嘆かず、しくじりも、難儀も、貧乏も、苦勞も、妨げも、更に厭はず、どんなことに出逢ふても、正しい心行をして、此道中、此道すがらは、神の命であ

ると思ひ、神のみちびきてあると悟つて、進まねばなりません、寒い寒い中を、通りこして、春の暖かな、よい時候となり、夏の熱い中を凌いで、秋の涼しい快い時節がくる、夜も更けて、眠たくなるほど、明け方に近づいており、節季の忙しい中を、越すと安氣な正月がくるのも、同じことで、苦勞や、不自由をこらへて辛抱しぬくと、樂しみや、自由のできる、面白い日がある、若い時の骨折は、買ふてもせよと云ひ傳へてあるのは、誠に味のある詞であります、心も身も、神におまかせして、そして前の話の様に、悟つて勇ましい心をふりおこして、通ふると、神の力がそふて、苦痛不自由の中も、思ふたよりも、案外やすくこされる、そこは目に見ぬざる神が、わが味方をして下さる、引立て下さるから、大丈夫に通りにこせるのであります、そして其苦痛や、不自由は、夢の様に、過ぎ去つて、後々の

談の種にもなり、人々を教みちびく、よい心得になる、慥な修行をしたのであるから、其時苦しまぎれに、不足を言ひ愚痴をこぼしたのは、満足と代はり、悲みの涙は、嬉し涙に代はるのであります、そこで始めて、苦は樂の種であることが、はつきりわかるのであります、神は見込みのある人ほど、さきに苦勞をさし、よい徳を積まして、世を救ひ、人を助けしめ給ふのであるから、誠を行ふ中に、苦痛のできるのは、深くよろこばねばなりません、

○忌服

忌服令は明治七年十月に太政官の御布告にて定められたりその令は下に掲ぐるものゝ如し

高祖父母	父	養父	方	方	忌服三十日	同	母	養母	方	方	忌服一日
------	---	----	---	---	-------	---	---	----	---	---	------

曾祖父母	父	養父	方	方	忌服二十日	同	母	養母	方	方	忌服一日
祖父	父	養父	方	方	忌服百五十日	同	母	養母	方	方	忌服二十日
父	母				忌服五十日	養父母					忌服百五十日
嫡母					忌服三十日	繼父母					忌服三十日
夫					忌服三十日	夫の父母					忌服百五十日
妻					忌服二十日	嫡子					忌服二十日
末子、娘					忌服三十日	養子					忌服三十日
養女					忌服三十日	伯叔父姑	父	養父	方	方	忌服二十日
伯叔父姑	母	養母	方	方	忌服三十日	兄弟姉妹					忌服二十日

異父兄弟姉妹	服三十日	嫡孫	服三十日
末孫、孫女	服七日	曾孫、玄孫	服七日
從父兄弟姉妹	服七日	甥	服七日
七歲未滿	父母は三日の遠慮其外は一日遠慮	姪	服七日

以上かみに示しめしたるが如ごとく忌服きぶくを受うくることなり尤もつとも遠國みんこくにて訃音しんだしらせを得た
 ときは父母ちちははは其聞そのきこ込みたる日ひより定式さだめの忌服きぶくを受けその他たは聞きこ込み
 たる日ひに尙殘餘なほのこりあれば其殘りそのこの日ひだけ忌いを受うくることなり

附記

産穢うぶみ 父七 日 血荒ちあらし 父七 日 流産りゅうさん 父五 日
 母卅五 日 母十 日 母十五 日
 形有かたちあつて生うまは流産りゅうさん、形かたちなきは血荒ちあらしといふ
 死穢しんみ 死人しにんに近ちかづきし者ものは一日遠慮いちにちのちか

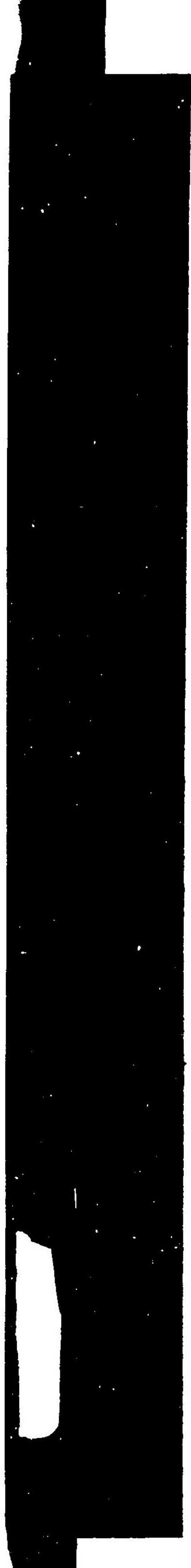
明治四十四年九月廿三日印刷
 明治四十四年九月廿七日發行

奈良縣生駒郡安堵村大字東安堵
 千四百六十四番地
 編輯者兼 石田正五

京都市上京區下立賣小川東入
 西大路町十番戶

印刷者 中西勝太郎

印刷所 同所 中西印刷合名會社



敬神要旨

石田守義

国立国会図書館

013976-000-3

特49-5

敬神要旨

石田 守義 / 著

M44

ABB-0223



特